

フォーラム

1. 開会挨拶

1) 実行委員長挨拶：市川浩一郎氏（NPO長野都市経営研究所 理事長）

荘厳な阿弥陀如来さまを背にし挨拶するのは気が引けるが、お許し頂きたい。

全国路地サミット2008 in 長野をここに開催するが、このように大勢の皆様に参加して頂きあらためて感謝する次第である。とくに事例を発表して頂く皆様にあっては遠方からおいで頂いたこと感謝申し上げます。

めまぐるしく変わる社会情勢の中にあっては、私どもの生活は色々な意味で多様化している。このような時代であればこそ、足下に横たわっている地域に目を向けることが非常に大切だ。

これまでの開発はどうしてもハードに偏りがちであったが、まちがもつ歴史を掘り起こし、足下に眠る資源を掘り起こし活かしていくことが非常に重要なことではないかと思う。そしてこうしたことが地域で生活している人間としてのつとめではないかと思う。

こうした視点で今日明日の長野を見て頂きたいと思う。門前町である善光寺と城下町である松代という異なる雰囲気をもつ地区をフィールドとして熱く語って頂きたい。



2) 来賓挨拶：服部夏樹氏（観光庁／観光地域振興部地域競争力強化支援室長）

観光立国ということで政府をあげて、また官民一体となって推進することになったが、その体制がお粗末であった。このため、国土交通省の総合政策局のなかにあった一部門を、省から少し独立することになり、10月から観光庁となった。

路地や横丁で思い出すのは、かつて外務省の在北京大使館に3年間勤務していたとき、北京市街のなかに胡同（ふーとん）という路地が多くあった。狭い道が土の壁で囲まれていて、伝統的家屋建築である四合院が多くこの胡同（ふーとん）に面し、古き良き北京の面影をしのばせていた。しかしオリンピックで都市開発の荒波のなかでどんどん消えていった。いま観光目的でこれを残そうという動きがある。人力車でまち巡りをするのである。また、実際にまちに住んでみようとして試みている西洋人がいる。

観光立国とは一体何か。それは「住んでよし訪れてよしの国づくり」であり、行って良かったところは住んでも良いということである。観光地域振興課ではどのようなことをしているのか。路地や街並みという視点でいけば、景観形成や電線の地中化を行い、昔の街並み昔の商店街、あるいは、わらぶきの保全などを応援している。また、まち歩き支援、たとえばまち巡りナビプロジェクトと呼んでいるが、携帯でメールを使うとかQRコードの活用などを進めている。

また、この10月1日から行っている観光丁の目玉施策として観光圏をやっている。ライバル関係にあった近隣の観光地同士が連携するのである。2泊3日以上での泊りのすすめである。夕方に温泉地でそぞろ歩きがいい。

重要なことは、人であり地域の方のやる気である。「どれだけアイデアを出せるか」「どれだけ地域から引き出せるか」にかかっている。



2. 基調講演 「まち歩きが観光を変える～長崎さるく博でわかったこと」

茶谷幸治氏（フリープロデューサー／元長野さるく博プロデューサー）

長崎市の観光入込客数は、90年は628万人であったのが15年後の05年には500万人に落ち込んでしまった。人口40万人で観光入り込みが約130万人減るとことはどういうことか。旅館は、つぶれ商店街はさびれ、もう耐えられる状況ではない。

こうした危機的状況から脱するためイベントを行ってきた。盛り返しもしたが一時的であった。「グラバー園」や「平和公園」「ハウステンボス」では観光客はやってこない。日本のテーマパークは全滅である。東京ディズニーランドオンリーである。

そのような時に思いついたのが「まち歩き」だ。江戸時代の公認の花街といえば、東京の吉原、京都の島田、長崎の丸山であるが、究極はこの丸山で遊んでくれたら良いのにということだ。調べてみると、どうも観光客も市民も長崎のことを良くは知らない。出島、唐人屋敷、しょうろう流しなど他にも色々があるが、誰も知らない。そこで長崎を知ってもらおう。歩いてもらおう。知ってもらうためにはご案内するのがよい。そしてまち歩きになった。

「長崎さるく」は、このような背景から「このままでは長崎はつぶれてしまう」を動機としてスタートした。それは平成16年（2004年）からであり、「金もなければ人もいない」なかでのスタートであった。“さるく”とは長崎の方言であり“ぶらぶら街なかを歩く”といった意味である。となりの佐賀の一部地域では“そうつく”という。

このため“さるく”を使い「まち歩きの博覧会」をやろうと企画した。はたして「まち歩き」で観光客がくるのか。観光のプロは100%「ノー」と言った。市民は「やりたい」と言った。なにが面白いのか。名所旧跡・温泉・観光バスに勝てるのか。しかし今、ほかに途がない。

こうしてパビリオンもなく有名人もいない「まち歩き博覧会」を行うことになった。

博覧会では観光客を案内する人が必要である。ガイドブックに書いてないところを案内しようということになった。このためには地元が案内しなければならない。地元が案内すると継続性があり、また生活観光になる。この点が良いのである。だから市民主体でないと成功しないのだ。

「さるく」には、「長崎遊さるく」「長崎通さるく」「長崎学さるく」の3つのまち歩きイベントが用意されてあるが、ガイドさんと一緒に歩く31コースある「通さるく」が最もはやった。「学さるく」は専門家の講座がつく所謂まち遊びである。これで十何万人がきた。これだけの人数で大丈夫なのかと心配されたが、ここで登場するのが「遊さるく」である。これは、ガイドはつかず地図をもって自分かってに歩くのである。この45コースある「遊さるく」を誘発できるから大丈夫なのである。つまり「遊さるく」は「通さるく」を誘発するための手口なのだ。

「通さるく」では1人で15人をみる。本当は4人くらいが良いが、ガイドの数が間に合わない。現在「さるくガイド」は現在500人。将来は2,000人をめざす。これまでガイドになるためには20日間の歴史講座を受ける必要があったが、これを変えてしまった。自分が得意なコースだけでいいということにした。ガイド内容は、詳しい内容ではなく楽しい内容がいい。多くをしゃべらない。

どのようにしてファンを増やしていったか。

長崎を楽しむ人の順番を考えた。まずここに住む市民であり、次に周辺の市町村である。そして



全国の人々である。これを基本として「市民の長崎意識を刺激せよ」「外に向かって自慢せよ」ということになった。お金がないから、市民から各自の縁故者をお願いして観光客になってもらうという市民力広報を行った。また、強い味方であるインターネットというメディア広報を行った。

なぜ、まち歩きによる生活観光が良いのか。

1つ目はこうだ。人は年をとって豊かになると色々考えるようになる。豊かになると人は色々考えるようになる。身近でみると伴侶以外あまり知らない。コミュニティをしらない。だから知りたくなるが中々入っていけない。このような時に頼れるものはふるさとである。そうすると「行きたい」「住みたい」「死にたい」都市をさがし求めるようになる。こうした人は、生産都市よりも生きがい（暮らしがいのある）都市を選びがちであり、結果として都市に要求されることが深くなってくる。生活観光は、このような要求に応える機会を与える。だから良いのだ。



2つ目はこうだ。街なかに見え隠れする資源である「まち遊び」「まち比べ」「まち自慢」について長老が言っていたことを誰が伝えるのか。人はこうした稗史に感動するのである。だから市民が生活観光で人に伝えるのが良いのだ。自分のまちを自分で楽しみ人に伝えるのだ。セントラルパークのニューヨークっ子やハイパークのロンドンっ子は、そこで楽しんでいるから良いのだ。こうした都市が観光都市になり一流都市になる。まち歩きは市民の自分のまち意識を育てる。「さるく博」では短歌や俳句のイベントを行った。その結果、極めてナショナリズムであり、これが良かった。

短歌：1等賞...遠くから来る朋あり長崎を自慢たらたら歩かせており（西部稔さん）

俳句：市長賞...わが町を夏より熱く語るかな（古田かほるさん）

3つ目はこうだ。観光に変化が生じて生きている。団体旅行から少人数や個人旅行へ。物見遊山観光から生活のまちを見て歩く観光へ。コミュニティ・ツーリズムの流行である。一昨年トロントで生涯を終えた評論家であり思想家であったジェイン・ジェイコブズ女史は、快適な都市の4つの条件を「複数機能」「非直線道路」「新旧混在」「人口高密度・多様な生活者」とし、多様性が都市の本質であり活力の源泉であるとした。こうした条件をみたす都市へと観光がシフトしつつあるのだ。

長崎さるく博覧会を行ってわかったことは何か。

それは「観光はまず内需から（市民にとって楽しいまち）」であり、次に「都市を楽しむことが都市観光のすべて（楽しい都市に人が集まる）」であり、最後に「まち歩きこそ最も重要な都市観光要素である（まち歩き＝楽しさの発見）」である。

そして当時の担当課長は、「さるく」で市長になってしまった。

（以上の詳細は、学芸出版社発行の「まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート」を購読されたい）



3. 第1セッション 「全国路地のまち事例報告」

1) 昨年度開催地報告「文化財を生かしたまちづくり」

静岡県新居町：馬淵豪氏（静岡県新居町都市整備課）

新居町には、江戸時代には箱根と並び最も重要な関所である新居関所があった。新居関所は日本で唯一現存する関所であり国指定特別史跡である。また、東海道53次の宿場町として栄え江戸時代につくられた町割が今も継承されている。

平成11年度に特別史跡新居関跡保存整備計画を策定し史跡整備事業に着手した。そしてその中の大きな課題として、大御門（おおごもん）の復元整備があった。大御門は関所の廃止とともに取り壊され位置すら分からない状況であったが、発掘調査で現在の国道301号内にあることが分かった。

幸いに関所前の国道は事業前にあったため、大御門復元も合わせて事業検討をすることができた。大御門の位置をほぼ確定したところ、大御門が歩道内におさまることが分かり、歩道の機能を確保するよう門を常時開放し一般の通行に供するよう考えた。

この考え方にもとづき、法的条件を確認し、道路管理者である静岡県に道路占用許可を受け復元することになった。

新居町では、こうした復元プロジェクトを進める一方で、旧宿場町内に残る伝統的な建築物257棟を中心に貴重な歴史的な地区として面的な保存継承を進めていくことにしている。また、歴史的町並み景観や豊かな自然環境を保全・形成していくために、これまでの景観要綱を景観法に則った施策に移行し、平成19年4月に景観行政団体になり景観計画策定に向けて準備を進めている。そして、住民のまちづくり意識は高まる一方で、町主催の「まちづくり塾」には多くの人が参加し、かつて芸者置屋であった小松楼をはじめ古い建造物の保存活用に向けた取り組みが始まった。

そして平成19年10月、「全国路地サミット2007 in 浜名湖・新居」が住民主体で開催されることになった。そのテーマは「路地文化の創造～“小路”のある暮らし～」であったが、このサミットを契機に人のネットワークがさらに拡大した。

今後は、こうしたネットワークを基本として、新居関所周辺まちづくり協議会（仮称）を組織化し、検討を行う協議会メンバーと、実際に街なかをフィールドに汗をかく検討部会や実行部隊という二層制で、関所周辺まちづくりを進めていく。



大御門：新居関所の西端に関所の出入口となる高さ5mもある大御門があった。発掘の結果、門基礎穴の位置からみて国道301号・町道側へとひろがっていたようだ。

出典：新居町 大御門・船会所・女改め長屋周辺の発掘調査報告書

2) 路地のまち活動報告「路地から考える少し先のまちの姿」

別府市：姫野由香氏（大分大学工学部助教／福祉環境工学科建築コース）

震災を免れた別府には8つの温泉がある（別府八湯）。それは別府（べっふ）、鉄輪（かんなわ）、観海寺（かんかいじ）、明礬（みょうばん）、亀川（かめがわ）、柴石（しばせき）、堀田（ほりた）、浜脇（はまわき）である。

別府温泉に竹瓦温泉館という入湯料100円の銭湯施設がある。市営で木質構造であるが、これを鉄筋コンクリート造につくりなおすという市の計画が浮上した。これに対して市民は危機を感じ何とかしなければならないということで、竹瓦クラブを立ち上げた。これが平成8年8月8日午前8時8分であり、別府八湯独立宣言をした。



のあと、この竹瓦温泉館で、筑紫哲也を呼んでフォーラムを開いた。そして彼はこんなに面白い街や路地空間があるなら、まち歩きをやったらどうかと言われた。そして別府ではまち歩きを、ガイドをつけて行うようになった。

表題は、昨年度に建築設計演習として学生に課したタイトルである。3～4名のグループによって共同制作してもらった。対象地は、かつて長崎市の係長で現在市長となられた田上さんも来られた別府市中心市街地である。

課題のテーマの根底にあるものは、身近な空間を考えることからまちの姿を描き出すことであり、学生には事前に、別府の中心市街地は都市計画や開発といった大きな視点では捉えきれない魅力をもつまちであり、「そのまま残すべきところを超えて形にしてみる」とか「問題解決の視点より魅力を引き出すことに留意する」など、柔軟な方法論で望むようお願いした。

まず現状を捉え、少し先（5～10年程度）にまちの姿が「どうなって欲しいのか」を考え、そのイメージにつなげる提案を建築の設計を通して行うようお願いした。

学生からは以下のような提案があった。

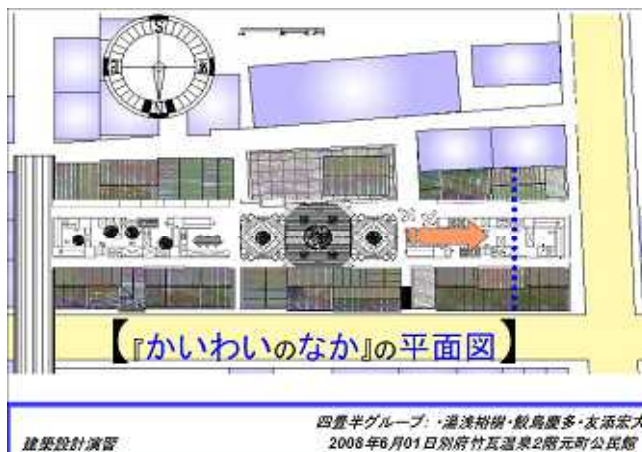
1：「かいわいのなか」...嘗て路地空間が担っていた生活を支える機能のあり方を改めて見直すことにより、路地を介した新しい生活スタイルを提案

2：「1000歩で味わう裏銀座」...銀座商店街の裏＝「裏銀座」という路地空間の魅力向上をめざし、まちに欠けているいくつかの機能を新しい建築により充填することを提案

3：「home」...別府市中心市街地の路地は湯治客や住民が普段着ですれ違い、新しい出会いの生まれる空間であった。その再興のために、滞在期間や年齢、国籍にとらわれない旅人の家（施設）を提案

4：「梅園小路」...対象地域で唯一、別府らしい共同温泉の入り口が面する小さな路地空間において、地域のコミュニティを支える空間創りを提案

5：「裏と表」...裏と表をつなぐ「境界」に、歩く者が裏としての路地の魅力を再認識できる空間創りを提案



今日は1:「かいわいのなか」を紹介する。竹瓦温泉に中央市場がある。戦後引き揚げ者のために住宅供給(4畳半)が行われたが1階部分が市場になっていた。そしてこの中に路地があるが、これをフィールドとした。

この路地のなかに3代続く、ふく屋というおでん屋がある。ここは路地を挟み厨房とお店部分が分離している。このため忙しくなると路地を頻繁に横切ることになる。学生はここが行き交うところ、かいわいと捉え、ここに4畳半の新しい生活スタイルを提案した。

3) 路地のまち活動報告「観光のもつ力」

新宿区神楽坂：坂本二郎氏(NPO粋なまちづくり倶楽部・観光担当)

私は神楽坂でガイドをやっている。ガイドは難しい。人格的なところまで評価しなかなければならない。ということで東京商工会議所はガイドを認定するのではなく、商工会議所がNPOを認定し、NPOがガイドを認定することになった。責任はNPOということになった。

神楽坂を中心にJR山手線一帯の地域性をみると、おおざっぱに言えば神楽坂より東方面は下町であり、西方面は山の手である。神楽坂は山の手に属し江戸時代は武家地であった。

大正12年9月の関東大震災で、銀座、新橋、日本橋が大きな被害を受け、神楽坂は一時的に避難の場所となり、戦後までは山の手随一の繁華街であった。ここまでは良かった。

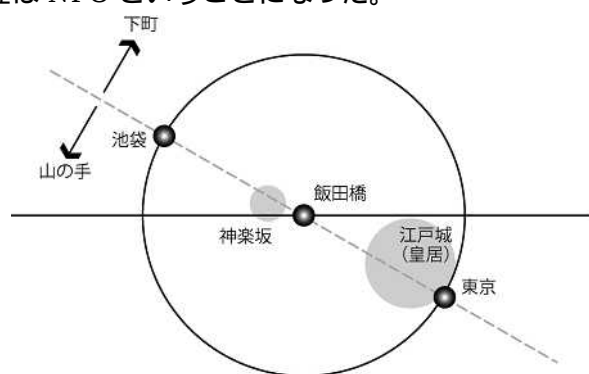
しかし、此度の戦争で東京は灰燼にきし、東京の構造が変化した。東京はターミナル文化に変容した。それは新宿駅であり、渋谷駅や池袋駅である。繁華街はこうしたターミナル駅を中心に栄え、モノもヒトも西へと移ってしまった。東においても東京駅や上野駅に遮られ、神楽坂の位置する山手線の中までは人も物も入ってこなくなった。トホホ

神楽坂はこうした余り恵まれない環境にあるが、ここ3~4年、観光の復興の兆しがあり、宿泊型ではないけれど、神楽坂のしつらえの路地でまち歩きをする人が増え始めた。

神楽坂最寄りの飯田橋駅はJR2本(中央線・総武線)と地下鉄4本(有楽町線・東西線・南北線・大江戸線)が集中し東京は山手線の中心に位置する。このため、すごく便利であり日帰りでのまち歩きで楽しめるのである。

神楽坂はかなり長い間、業務地であった。弁護士事務所とか設計事務所とか印刷業などサービス業が多かった。このため昼間人口型の街となり土曜と日曜がダメな商店街であった。しかし、この3年くらいで土曜も日曜も、まち歩きで劇的に人が増え始めた。観光というのは本当に力があるものと思った。ただし力があるものはこわい面もある。4年前に東京都が観光まちづくりプランナー塾をつくった。私もそこに3年間通って観光について学んだが、失敗事例を多く学んだ。神楽坂は小さいまちである。人口は2,900人である。このような街でも東京の人気スポットになれたという実績をみなさんに伝えられたかと思う。

私がやっているガイドは有料である。観光は産業であり経済活動である。これまではひっそり



やっていたが、これからが大変だと思う。一方で、イベントだけの無料のコンシェルジェチームがある。この2本だてで神楽坂の現在の観光を担っている。

4) 路地のまち活動報告路地のまち活動報告「人と人を結ぶモーニングウォーク」

飯田市：牧野忠彦さん（りんご並木のまち飯田モーニングウォーク代表）

飯田市は人口105,000人で、長野県で4番目に大きい都市である。長野市、松本市、上田市に次ぐ。有名なのは人形フェスティバルだ。全国から世界からくる。

飯田の路地は裏界線（りかいせん）という。観光客をいかに裏界線に誘導するかをずーっと研究している。

昭和22年（1947年）に旧市街地の8割を焼き尽くす大火があった。そして大火の復興から生まれたのが「りんご並木」であり「裏界線」であった。

りんご並木は防火帯である。地元中学生が復興のシンボルとして47本を植え、飯田市民に夢と希望を与えた。現在は40本ある。浜松市にフルーツパークというのがありりんご並木があるが、飯田市をモデルにつくった。飯田市から100本のリンゴの苗を送った。

裏界線は防災用通路である。各宅地から土地を背割りで1mずつ供出してもらい、密集住宅地に幅2mの消防活動空間と避難路に資する通路ができた。旧市街地に約50本・総延長5kmある。

平成15年（2003年）のりんご並木誕生50周年を機に、「りんご並木活用プロジェクト」を始動した。すなわちモーニングウォークの実験開始である。11月29日（土）に、りんご並木周辺を歩いたあと、朝食をとりながら親睦を深めるイベントを行った。

ナイトとか浴衣もあったが、モーニングに落ち着いた。こうした検討を重ね、平成16年（2004年）4月、モーニングウォーク実験（その2）を行った。りんご並木周辺にある桜の名所～古木の桜で有名であるが、これを愛でて歩いた。

こうして本格的なウォーキングを開始することとし、第1回は平成16年5月9日（日）に行い、このあと毎月第2日曜日の朝7時集合・出発とした（ただし1月と2月は8時）。

以降、平成20年（2008年）10月12日（日）まで一日も休まないで54回を実施した。宿泊する人も参加する。毎回テーマを設けてコースを設定した。特別講師をお願いする場合もあった。

コースは例えば、さくらウォーク「飯田の名桜をめぐる」、「商店街っておもしろい！看板建築？」（講師：中心市街地活性化係長の遠山広基さん）、「城下町の寺院をめぐる」（講師：飯田市歴史研究所研究員の金澤雄記さん）、「飯田線の寺院をめぐる」（講師：東海旅客鉄道株式会社飯田支店の大阪係長）、「仏教美術の魅力にふれる」（講師：飯田市美術博物館研究員の織田顕行さん）



5) 路地のまち活動報告「辻と小径のまちづくり～五感に響く・心にやさしい寺の町」

諏訪市：小口秀孝氏（法光寺住職／寺のまち「辻と小道」事業代表）

街並みを形成する重要な要素である辻と小径は、人々の暮らしが息づき、笑いと涙と人情が交錯するまちのもう一つの顔である。

諏訪市は、路地裏の景観を保護するために、この辻と小径をいかした独自のまちづくり事業を平成19年度(2007年度)から展開している。それが「辻と小径のまちづくり支援事業」である。

対象区域内の土地と建物の所有者の2/3の以上の同意が必要であり、協定を結んで自主的に管理しなければならない。しかし事業の限度額は何と約1,000万円もあり、補助率は6分の5と手厚い。

この初事業の対象は、諏訪市の寺町と呼ばれる場所であり、500m位の区間に6~7のお寺がある。ここを範囲にした。具体的には法光寺と貞松寺の間の約80mと、法光寺と正願寺の間の約80m区間である。寺の風情をいかした和風を基調とした景観づくりを進めるため、ブロック塀を木製の塀に替え、住宅の壁を改修した。消防屯所は塗り替え窓を格子に改装した。

また対象区域では、建物の高さ・色彩・材質、塀の形状・色彩・材質、屋外広告や自動販売機の設置などに関する制限を設け、協定を結んだ。

そして寺の横を流れる小川のせせらぎや、木の枝にとまる小鳥の鳴き声までが地域の資源と捉えるようになった。こうした街づくりの地産池消というか、その地域にあうものを発見し、その地域にあうものを使って、そしてその地域みなさんに地域の良さを分かってもらうことが大切だ。

この景観整備は、まちづくりの最初の仕掛け部分と考えている。仏をつくって魂を入れずではためであるから、外観はできたのでこれからが本番である。来年は、辻々に残っている物語をいかした何かを行いたいと考えている。

仏教語で五感というのがある。それは、“げん・に・び・ぜつ・しん”(眼・耳・鼻・舌・身)であり、この五感で風景を感じとり、これを最終的に“い”(心)で感じて、そこに住んでいる人の心が優しくなる、こういうことが街づくりの基本ではないかと思うようになった。



6) 次回開催地報告「近隣住環境計画を活用した路地を活かしたまちづくり」

神戸市：松原永季さん(スタジオ・カタリスト代表)

今日は、市内各地での取組みについて紹介する。

路地はすばらしい。しかし住んでよしという点では不安がある。安全性を考えると、火事が来たらどないなのか、自然災害があったらどないなのか、地震がきたらどないなのか、といったこと。これを大きな都市計画たとえば再開発などでやろうとしても、中々生き残ってこないだろう。それで、なんとか合法的に路地が残せないかという視点でやってきた。



神戸市の路地は、耕地整理や区画整理後の街区内路地、山麓スプロール地帯の路地、漁村集落の路地、そのほか旧集落内路地や大邸宅敷地周辺路地などがある。

(1) 長田区山麓市街地でのアプローチ

戦後できたまちで、割と無計画にできたところである。住宅がスプロールしこの中に路地ができていった。

神戸大学、コンサルタント、行政（区）が合同で研究会を立ち上げ、地域のふれあいまちづくり協議会にアプローチした。第 1 段階のアンケート調査が終了した。

この 10 年から 20 年の間に空き地が増えてきた。法的に難しい道路が多い。空地の管理が重要であり、このためコミュニティの場として地域管理をめざす。

(2) 垂水区斜面密集市街地でのアプローチ

神戸市の西の方にあり明石市に近い位置にある。昭和 30 ～ 40 年代に無計画に小規模に広がったまちである。現在、事業は手待ち状態にある。

まちづくり協議会が中心となり、第 1 段階は地区レベルの防災計画、第 2 段階は街区レベル（自治会レベル）の防災計画を策定した。

この計画に沿って、建替促進のため「まちなか防災空地整備事業」により老朽家屋を除却する。また、避難路確保のため行き止まりは空地を公園にして行けるようにする、などを目標としている。

(3) 長田地区駒ヶ林地区での近隣住環境計画

駒ヶ林地区は古くからある漁村である。路地あつての駒ヶ林であり、路地以外はそれほど古い建物が残っているわけではない。このため地域には何とか路地を残したいという思いがある。

建築基準法が建替えのネックになっており、道路の中心から 2 m セットバックとか、建ぺい率 60 % を守ると、敷地や建物が小さくなってしまいうため建替えが事実上できないケースがある。そのため外へ出て行くということになって流出人口が増加する。特に若い人の流出が顕著である。

そこで近隣住環境計画を策定し、この計画に沿ってゆるやかな更新を進めている。

例えば「建築基準法上の道路でないこの路地は、避難等の安全性のため現状の幅員の確保に努め、建築時には路地中心から 1 . 3 5 m の空間確保に努める。... 」、「この路地は建築基準法 4 2 条 3 項の道路で、幅員は 2 . 7 m として指定されています。... 」、「この路地は建築基準法 4 2 条 2 項の道路で、街区内への緊急車両の進入確保などのため幅員 4 m とします。... 」など普通は最低で 4 m になるが、主なものだけ 4 m で後は 2 . 7 m でもいいではないかということになった。これが何故できたか、神戸市が特定行政庁として緩和してくれたからである。現在、権利者と話をしているところである。

(4) 梅ヶ香地区・細街路整備とまちなか住宅

旧国鉄所有地の不法占拠の清算からスタートした。不法占拠建物とその周辺路地を神戸市住宅供給公社が事業用地として活用することにした。

公社がコンペにより事業者を決定し、コンペ当選作品である住宅を建設し分譲する。道路は市に移管する。

長田区役所が支援施策と道路整備を行う。また地元調整をコーディネートする。

現在 9 戸完成し、7 戸契約した。

(5) 野田北部地区・路地まる洗いプロジェクト

阪神・淡路大震災で地区の半分が焼失した。このため地区の東半分（海運２・３丁目）だけが区画整理された。

一方の残された西半分（本庄・長楽町）については、区画整理される海運２・３丁目とのまちなみの差異を避け、まちを一体として復興するため、街並み誘導型地区計画と街なみ環境整備事業を活用することとした。

平成９年の事業開始から１０年を経て２８路線を完了させ平成１９年３月に事業完了となった。これにより対象地区内のほぼ全ての路地を美装化し、震災後もっとも早くまちを復興した。

そのような中、地域のみんなで検討し決めた地下自由通路が日々汚れていくのがとても辛く、なんとかならないものかということで、「鷹取駅自由通路まる洗いプロジェクト」が開始された。

そしてこれが路地に展開されていく。復興基金の助成事業の支援を受け、毎月第１日曜日に、地元のＮＰＯとも連携して汚れの多い路地から順次まる洗いしている。

(6) 来年の神戸サミットに向けて

来年度の神戸サミットに向け、平成２１年５月か６月ころに、（仮称）関西・路地サミットを開催する予定である。このため関西周辺での「路地のまちづくり手法」を整理していく。

今日は酒をもってきた。地震で被害を受けた灘五郷である。交流会で呑んで欲しい。

4. 第2セッション 「長野の歴史と文化を活かしたまち歩きの事例発表」

1) 「善光寺門前は伝説の町、映画の町」

小林玲子さん（歴史の町長野を紡ぐ会代表） 小林竜太郎（長野郷土史研究会青年部長）

ようこそ長野へ

歴史の町長野を紡ぐ会は平成14年(2002年)に、50年くらいの歴史のある長野郷土史研究会から発足した。「郷土史の視点に立って町の活性化に寄与」「善光寺表参道(長野駅～善光寺)の史跡案内」「善光寺と門前町に伝わる伝説の口演(語り、紙芝居)」を行っている。

善光寺表参道のまち歩きコースは、3つある。



(1) 善光寺表参道七福神めぐり

平成5年(1993年) 長野郷土史研究会が制定した。前回の平成15年(2003年)の善光寺御開帳から歴史の町長野を紡ぐ会が案内している。そのときの御開帳には、2ヶ月で635万人きた。

長野駅から善光寺までの約3kmであり、それは、一番・寿老人(かるかや山西光寺/北石堂町) 二番・大黒天(大国主神社/南県町) 三番・福祿寿(秋葉神社/西後町) 四番・弁才天(往生院/権堂町) 五番・布袋(御本陳藤屋/大門町) 六番・恵比寿(西宮神社/岩石町) 七番・毘沙門天(善光寺世尊院釈迦堂/元善町)である。

6年間案内した。JR西日本でも吉永小百合で人気が出たコースである。

(2) 善光寺門前七稲荷めぐり

七福神めぐりだけかという声が聞かれるようになったため、平成16年(2004年)に七稲荷めぐりをつくった。伝説を語りにした。

それは、長野駅からスタートし、一番・千石稲荷、二番・刈萱稲荷、三番・於菊稲荷、四番・田面稲荷、五番・矢島稲荷、六番・古録稲荷、七番・豊田稲荷、番外・福生稲荷である。



(3) 善光寺門前七天神めぐり

七稲荷めぐりに続き、次の年に七天神めぐりをつくった。

それは、もんぜんぷら座前からスタートし、一番・島の天神、二番・長野天神、三番・立町天神社、四番・桜枝町天神社、五番・上西之門町天神社、六番・伊勢町天神社、七番・新町天神社である。古い信仰なので何れも善光寺の近くにある。

なぜ7にこだわっているのか。もともと江戸時代から善光寺界限には7名所というのがあった。7というのは寺であったり神社であったり小路であったりする。7×7=49という名所というのがあり、これをヒントにした。

こうした事業の柱はまちづくりにあり、「文化遺産や行事の保存と継承」「表参道と界限の新しい魅力の発掘と発信」を基本に置いた活動としている。

善光寺門前は映画の町である。

平成19年(2007年)6月に公開された、大林宣彦監督による映画「転校生 さよならあなた」の舞台となった。歴史の町長野を紡ぐ会はロケ地めぐりに協力し、長野郷土史研究会青年部では、大林監督の故郷である尾道と長野の比較などの行事を実施した。

映画には、坂や階段のある道、宿坊の立ち並ぶ道、曲がりくねった道など、たくさんの路地が登場する。大林監督は「50年後の長野の子どもたちに見せたい映画」とするため長野の路地ばかりを撮影していた。

平成21年は善光寺御開帳である。これをきっかけに、歴史の町長野を紡ぐ会は、門前町を歩いて散策できる回遊型のまちづくりをめざしたい。



2)「城下町松代まるごと博物館 - 路地の魅力発見」

丸山日出夫さん(NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会会員 / 長野県文化財保護指導委員)

(1) 松代の概要

長野市松代町は人口2万人。善光寺とは12km離れている。年間30万人の観光入込客がある。参考まで、善光寺は年間400~450人である。

上杉武田の川中島合戦の史跡、真田十万石の城下町の面影、幕末期に開国を唱えた先覚者佐久間象山、松代藩の財政再建に取り組んだ「日暮碇」の恩田木工、日本初の舞台女優である松井須磨子、童謡おさるのかごやの作曲家である家海沼実、硫黄島の戦いの最高指令官である栗林忠通中将、などを輩出

近年、第2次世界大戦時における大本営地下壕跡は国の戦争遺跡指定に向けた調査が行われ注目を浴びてきている。

松代駅は大正11年にできた木造3階建てである。

(2) NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会の発足

平成12年に松代地区中心市街地活性化基本計画ができ、その計画を行政任せにしないで住民参加で進めようと、一般住民有志に呼びかけたところ100名が賛同し、平成13年6月に「法人夢空間松代のまちと心を育てる会」が発足した。

従来の肩書き偏重の組織づくりから、すべての肩書きをはずした、フラットなネットワークの誕生であった。



(3) 松代探訪による魅力発見

「武家屋敷のお庭拝見」「お寺めぐり」「町家街並み路地めぐり」などのイベントを継続的に開催していくうちに、町内外から大勢の参加があり、今まで気づかなかった松代の魅力を再発

見していった。「松代は駄目よ」といていた人々が数年して「松代は素晴らしい」という意識転換が起こっていった。

こうした中、手つかずであった江戸時代の名残をとどめる商人町の町家についての取組み機運が高まり、平成14年に街なみ環境整備事業を導入し、町家の街並み整備へと進んだ。

(4) まち歩きルート開発によるガイドブック発刊と、まち歩きの普及

年10回程度の散策会を通じて地域資源に関する情報を収集し、点から線、線から面にしていくために散策ガイドブックを発刊した。そして松代全体をまるごと博物館として活性化することを心がけてきた。

現在までに「信州松代夢空間めぐり」「遊学・雑学・松代ウォーク」「山里めぐり西条」「山里めぐり東条」「寺めぐりスタンプ集印帳」「ゆったり町家めぐり」「のんびり武家門めぐり」「松代の建物36選」などを発刊した。

まち歩きを楽しむため、松代高校の生徒さんの協力を得て、32の寺めぐりスタンプラリーを整備した。また、平成20年には、街なかに解説版を20カ所設置した。

(5) そのほかの実践

登録文化財推進委員会を結成し100カ所を目標に、国の登録有形文化財に登録する運動を通じて、歴史的建造物を保存し活用する取組みを進めている。現在までに26カ所51件が登録されている。

松代ゆかりの人物で社会的に活躍した人を発掘し、これを広くアピールするため、案内板の設置や冊子への取りまとめなどを進めている。将来は、松代人物館の設置をめざしている。

さまざまな散策会にはできるだけ、子どもたちの参加を促している。散策ガイドブックは子ども向けも作成し、学校で活用してもらうなど次世代育成に心がけている。

(6) まちづくりネットワークの広がり

平成14年から、3月3日から4月3日までの月遅れのひな祭り「松代でひなまつり」を開催することにした。当初は25カ所の展示だったのが現在は、平成20年には84カ所とまちなか全体に広がりがでてきた。

平成16年度に、観光都市をめざし「遊学城下町」「エコール・ド・松代」を合言葉に、松代を全国ブランドに押し上げるためのキャンペーンを行った。観光客は30万人から80万人にふえた。

平成18年から、長野電鉄沿線の松代・須坂・小布施・中野・山ノ内の5都市連携で、3月3日から4月3日の一ヶ月にわたり「ぶらり北信濃ひなめぐり」を開催し首都圏からの観光客を入れ込んだ。

平成19年に、「神奈川大学・松代町・町づくり研究所」を松代に開設した。国の登録文化財推進のなかで同大学の建築学科の西和夫先生との連携が深まり、NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会と共同し、まちづくり拠点の強化を図った。

(まとめ)

合併以来失っていた自治エネルギーが今また再結集してきた。地域の自然や歴史、文化をし

っかり掘り起こして現代によみがえらせて新たな地域文化を創造して次世代につなげていきたい。

5. 第3セッション パネルディスカッション

「路地を活かしたまち歩き～新しい観光資源としての路地・小路」

- パネリスト : 茶谷幸治氏（フリープロデューサー）
 姫野由香氏（大分大学工学部助教）
 坂本二郎氏（NPO粋なまちづくり倶楽部・観光担当）
 小林玲子氏（歴史の町長野を紡ぐ会代表）
 香山篤美氏（NPO法人夢空間松代のまちと心を育てる会事務局長）
- コメンテーター : 今井晴彦氏（全国路地のまち連絡協議会世話人）
- コーディネーター: 石川利江氏（ISHKAWA地域文化企画室代表）

（コーディネーター石川氏）

昨年のサミットのとて、神戸の松原さんとじゃんけんをし、勝ったのか負けたのか良く分からなかったが、今年長野開催ということになった。予想以上に集まって頂き驚いている。みなさん聞き疲れておられるようなので、3分内で感想でもPRでもして欲しい。



（会場：新潟__池田氏）

皆様のお手元にあるのは、我々路地連のパンフレットである。丹精をこめて丁寧につくった。いつかサミットを開催したい。パンフを持ってきているので見て欲しい。



（会場：岡山三味線横丁__大西氏）

私はまだ入会1年の新入生。元料亭や蔵を改造し、江戸時代の鉄問屋と造り酒屋のものを展示している。そろそろ仕事が引き継げれば時間をさき、「まち歩きがまちを変える」をテーマに活性化をやっていきたいと思っている。



（会場：北区__荒木氏）

北区の道路公園課に勤務しております。第1回全国路地サミットを開催した北区（十条）からきた。

（コーディネーター石川氏）

パネリストの方にききたい。この長野をどう感じたか。



(パネリスト茶谷氏)

日本の地方というのははすてたものではないと思った。もう東京や大阪は面白くない。どうしてこれまで取り扱われて来なかったのか。これから取り返していかなければならない。ここには豊かな文化がある。この文化を伝承するためには、みなさんにがんばりがないとダメ。これにすぎるしか手はない。



(パネリスト姫野氏)

カメラを構えなくなる場所というのがある。“心いき”というのか。思わずシャッターをおろしたくなるまちだ。今日歩いたまちにもあった。



(パネリスト坂本氏)

ここ長野は古い建物がいろいろ残っていてすばらしい。神楽坂は空襲で燃えてしまい何も残っていない。観光資源は何もない。だから最も古くても60年の建物しかない。ただし道は残った。

有名になったのは、テレビのおかげだ。木曜10時からフジTVで放映中の、倉本総脚本の「拝啓、父上様」は神楽坂の料亭坂下を舞台にした物語だ。

神楽坂のまちづくりの良いところは、まちとびフェスタをやって「外案」つまり外の人の意見を柔軟に取り入れている点だ。地域内の人の意見ではない。これが視野を広くしてくれる。まわりには神楽坂を労ってくれ、お節介をやいてくれる人がたくさんいる。その意味では街は多少弱い方がいいかも知れない。



(パネリスト小林氏)

みなさんの話を聞いていて、カルチャーショックを受けた。話されるみなさんが自分の地域を自慢するのがいい。他の人に伝えたいというのがいい。

観光客が長野にきて、善光寺でほんの何分かのお参りをして帰るだけで終わらないよう、色々な“めぐり”を用意した。大林宣彦監督は「これが長野だ」と言わんばかりに裏路地ばかりを撮影された。“めぐり”には裏路地が多く含まれる。今日のみなさんの路地やまち歩きの話聞き、あらためて長野には色々な良さがあることを知った。



(パネリスト香山氏)

松代は昭和41年に、周辺市町村とともに長野市に合併し市の周辺地域となったため、住民の

声が行政に届きにくくなり、住民の自治エネルギーを発揮できる場がなくなった。素晴らしい歴史や文化があるのにいかしきれていなかった。

そうした中、平成5年3月に長野高速道路が開通し長野IC松代地区にでき潜在性が高まり、平成12年に松代地区中心市街地活性化基本計画が策定され、この計画を進めるために100人のまちづくり有志が動き始めた。

こうした地域のがんばりにより外から大勢の人がくるようになった。そして外からきた人は路地裏を見て感動している。

(コメンテーター今井氏)

ここ長野や松代には、ものすごく文化資源があって良い。これで観光ということだけでも、一方で世の中には、ゴミみたいな街でがんばっているところがある。この点、向島の小川さんどう思うか。

(会場：向島_小川氏)

4m道路をつくれという法律が、まちを再生できずにダメにしている。古い建物がこれらからどのように新陳代謝していくのか。街並みが保存され或いは消されていくのか。それが非常に興味がある。

全国各地の街が建築基準法という法律で、一律に整備されていくが中々うまくいかないのではないかと。先ほど神戸の話聞いたが、4m道路については私も考えて国の役人に言ったことがあるが、国家賠償法にふれるからダメだと言われた。4m下がった人に対して賠償しなければいけないと言われた。

“路地”というのは、平成12年(2000年)に向島博覧会を開催したときに、今井さんが“路地”こそ日本の大事な資産だと言ったところから生まれた。つまり向島から生まれたのである。

(コメンテーター今井氏)

外からの目というのが大事そうだが、会場には、地域の魅力を引き出し地図にされている本職のプロがいらっしゃる。午前中のまち歩きで、一生懸命に写真撮影されていた高橋さん、感想は。

(会場：北区田端_高橋氏)

これは特許を使った地図である。東大の三浦先生が宇宙工学で特許をとった技術で、ロケットのソーラーパネルがパッと開いてパッと閉じる、という三浦折りである。これを地図に応用したものである。パッと開ける。もう一つある。Zカードと言い南アフリカあたりからきた。横にZに開く。

民俗学に“ハレ”と“ケ”がある。ハレというのはガ



イドブックに載るような観光地的なものであり、非日常である。晴れ着とか晴れ舞台とか言う。ケというのは逆に日常のことを言う。まち歩きするときはこのケを大事にする。どちらかという日本人の本質は“ケ”にあると思う。私がつくる地図のなかにはハレの部分とケの部分を織り交ぜている。

(コーディネーター石川氏)

気になっていることがある。さきほど新居の馬淵さんのお話は途中で切れてしまっており、話が足りないのではないかとと思っている。

(会場：新居__馬淵氏)

昨年の長野サミットでは、新居町のまちづくりは、周回遅れのトップランナーという言葉を受けた。歴史的なものは多いが未だ何も手がついてないというのが状況である。

17,000人の小さいまちではあるが、昨年サミットを行い自信がもてた。これからは文化財を使ったまちづくりに望む予定である。

(コーディネーター石川氏)

埼玉県小鹿野町の方が来られているようだけれど。

(会場：小鹿野町__加藤氏)

中心市街地活性化基本計画を策定中である。この中には路地をいかした事業があり、これからがんばる。

(コーディネーター石川氏)

担い手が重要であるが、最初はどうなのだろう。茶谷さんどうだったか。

(パネリスト茶谷氏)

長崎さるくは、最初3～4人で始めた。だんだん増え始め、途中で止める分けにもいかず、最終は延べ3万人にもなった。夏ものすごくあつくなかったが、誰も止めるという市民はいなかった。

市民のエネルギーを引き出すためには、これをどのようにして外に向けて放出していくかが重要だ。

マスコミが重要だが、地方においても東京のニュースは流れるが、地元のニュースは今一である。いつも地元に対してどのようなメッセージを出していくかが大問題だ。長野にはどのようなローカル媒体があるか。信濃毎日などのローカル新聞があるだろう。これがないとどうするか。これがダメなら口こみしかない。また、今はインターネットがある。外に伝えるために使える媒体は何でも使うといい。

長崎の場合は、市民5万人が市外の縁故者に向けて手紙を書いてくれた。「長崎からの手紙」である。これを集め郵便局に持って行った。この効果があった。一人4通書けば20万人への私的なダイレクトメールとなり、ものすごい伝播力になった。

(コーディネーター石川氏)



善光寺には700万人きているが、仁王門から下にきている人は数%であり、善光寺の中だけで完結している。如何にこの方たちを長野のまち中に入れるかが大きなテーマである。

(パネリスト小林氏)

人の力というのはすごいと思う。善光寺が何故このように大勢の観光客でもっているのか。鎌倉時代からの歴史の積み重ねがあるのだ。大昔から人が口伝てに全国に伝えアピールしてくれたのだ。ではこれから先、同じことが何年も続くのかと思うと、そうではないだろうと感じている。地域の人が何かを伝えていく必要がある。

(パネリスト姫野氏)

別府は歓楽街があるなどバリエーションがあっていいところだ。こうしたところに観光客をたくさん呼ぶことはとても大事だと思う。しかし、沖縄の人から聞いた話だが、観光とは地域の資源をすり減らしてなりたっていると言われた。だからすり減らした部分の何かを充填しなければならない。その充填すべき術を知らないといけない。「増やす」「休む」が適度にできなければ、逆に来る人を減らすことも考えなければならない。



観光は量で決まる部分が多い。入り込み客数であり売り上げであり宿泊数である。しかし、茶谷さんが言われるように、満足感がとても重要だと思われる。

キッズガイドをやっている。子どもを養成している。あとの世代のことをこれは重要だと思う。

(コーディネーター石川氏)

観光のあり方が変わってきているように思う。もうすり減らすような観光はやりたくない。私は、本当は松代には車を入れたくない。一日に何台と決められたら良いと思う。関所がないからそんなことはできないが。

(パネリスト香川氏)

この間、京都から俳句の愛好会がきた。「静けさを独占していいですか」と言われた。松代は本来、静かな佇まいを売るのが良いかも知れない。しかし人が多く来るようになるとそうもいかない、かなり本来の良さをなくしてしまう可能性がある。だからある程度の節度をもつ必要がある。



(コーディネーター石川氏)

外側の人支えてくれるという神楽坂についてお聞きしたい。応援団とは。

(パネリスト坂本氏)

地元が弱いから動きが悪い。粋なまちづくり倶楽部というNPOがあるが、殆どは外部の人だ。地元の人とはもう一人しかいない。だから確かに幸せなことだと思っている。私は37年間商店街の人間であるため、どうしても商店街の立場から街を見てしまう。販促活動をやってきたが、全てを尽くしたという感がある。現金積み取りとか色々やった。そうすると観光は力強い。37



年間どうにもならなかった商店街が、たった3年間で土曜日曜も人が来るようになった。そうすると街に元気が出る。

とってつけたような話だが、100人会きもの会もやっている。川越や桐生と連携してやっている。昨日は須坂に行ってきた。蔵のまちで織物のまちだ。明治以降の特産品で絹がすばらしい。そして絹に関わった蔵がいい。

(コーディネーター石川氏)

茶谷さん。これから大坂があるが。

(パネリスト茶谷氏)

「さるく博」が終わって身が軽くなったと思っていたが、大坂の仕事することになった。

いま大坂がひどい状況にあり、どんどんイメージが悪くなっている。怖いとか危険と言われてる。娘さんの縁談が進まないと言われてたりしている。タイガースもだらしがない。こういう中で吉本とかもたこ焼きとなると一方的に低い方に流れていく。

仁徳天皇時代から築きたい文化があるのに、蓄積されていない。建築や文化があるのに大坂の人間が知らない。この10月6日から大坂の仕事をやるようになった。

大坂は全部路地のまちだ。御堂筋以外すべて路地だ。これをきれいにしようとしている。少子化で金がないのに、これではダメだ。そこに住んでいる人やそこにいく人、仕事をしている人が文化を育めるようにしなければならない。

(コーディネーター石川氏)

最後にまとめとして今井さん。

(コメンテーター今井氏)

路地と観光を結びつけるのは何か。それは茶谷さんが言った「生活観光」だろう。茶谷さんが言うように路地は、メインストリートと違い、生活が感じ取れるところであり、まちの人たちの生き様とかがあり、直接心に響いてくる場所だ。そういう意味でまちの人と心の交流ができ路地の優れた点に挙げられる。

もう一つある。日本は昔から路地しかない。今ある路地はかなり古いものが多い。建物は火事でなくなるが路地はなくなる。そういう意味では街の歴史そのものが路地であり、路地とは歴史とか文化を伝えるものでもある。長野もそうだったが不思議なことに路地を歩いているとお寺と神社に出くわす。そうして路地をいかすと街の歴史や文化を使えるようになる。

そう考えると、これからの観光の主要な舞台は路地ではないかと思うわけだ。

今日も発表でも善光寺、松代、飯田市、諏訪市で路地を紹介頂いたが、どうも長野県には路地が多いのではないかと。他にもありそうだ。須坂市も小諸市も上田市もそうだ。長野県というのはそういう意味では、経済的には恵まれてはいないが、路地には恵まれているようだ。

こうなると、信州路地の旅という一大路地観光をやったらどうか。ここは一つ、県下の路地を繋ぎまらごと観光化し、長野県内版路地観光を確立し、「長野路地博」をやったらどうか。これを「信州路地の旅」で売るのがいい。



ということで提案であるが。長崎は「さるく博」でやったので、長野は「路地博」で一斉にやったらどうか。それで茶谷さん。最後のご奉公で長野県を面倒見てもらえないか。

(コーディネーター石川氏)

今日は長い時間ありがとうございました。パネラーの方に拍手をお願いします。

6．閉会挨拶

小澤一郎氏（全国路地のまち連絡協議会世話人、元建設省審議官）

石川さん。大成功ですね。それから服部室長ありがとうございました。

現在観光庁長官である本保氏と今井、そして私で、10年くらい前に都市観光をつくる会を結成した。残念ながらなくなられた木村尚三郎先生、この先生をキャップにしようということで、我々三人が動いた。3年間都市観光とは何かというのをやった。そういう関係で本日本保さんに頼んだのである。観光とまちづくりは相性がいいということで、まちづくりを専門とするメンバーが中心となって活動した。

ちょうど10年前に中心市街地活性化の問題があった。そのとき中心市街地の問題を商業問題で捉えない方がよいのではないかという議論をした。特に、我々はまちづくりの専門家であるからということもあって、地方の中心市街地における生活空間を何とか再生することと街なかに人にきてもらうという2点が重要ではないかと思うようになった。ということで、まちづくり部隊における地方都市再生の基本戦略を「生活空間の再生」と「都市観光」であるとした。

今回6回目のサミットであるが、今井さんはこれに加えて、路地から攻めようではないかと言うようになった。メインストリートは商業空間からではなく、路地から攻めるのが、観光の問題も生活空間の再生も違った味があってよいのではないか。メインストリート側とリビングストリート側の双方からいくのがまた違った地方都市の再生ができるのではないか。たぶん彼もこう考えているのではないか。

こういうことがこれからも続くと思う。やるたびに関心のある人が増え、やるたびにプレゼンテーションの内容が充実し、やるたびに自慢話がきけるようになっていられる。

来年もみなさんの参加を待っている。今日はどうもありがとうございました。



7. 交流会

1) 長野市長挨拶

今日は遠くから「全国路地サミット 2008IN 長野」にご参加いただきありがとうございます。

善光寺界隈を歩いていただいたということですが、中世から多くの参拝客を集めた善光寺の周りにはまだ観光客が知らない路地、小路がたくさんあります。皆様に発見していただき、全国に発信していただけることは大きな喜びです。

また、明日は松代を歩いていただけるとのことですが、小さな城下町の歴史の残る路地をお楽しみください。



2) 実行委員会メンバー紹介



3) 交流会



